

ジャパンオープン3位、マスターズ国内予選1位、西GP第2戦V

自分基準ビリヤード ——ブレない男の撞球哲学

栗林 達

Toru Kuribayashi

日本のプールシーンで最もタフな男かもしれない。
富山に住み、所属店の仕事をしながら、月2回は関西あるいは関東の試合に参戦。
本誌の取材のためだけに、徹夜で上京してキューを握ったこともあった。
今年3月、あの過酷な『ジャパンオープン』を日本人で一番長く戦って3位。
翌日、『World Pool Masters 日本予選』を朝から深夜2時まで戦って権利獲得。
戦い終わっても「疲れた」の一言もこぼさなかった。
生涯ビリヤード一本と決めた男はこうまで遅しくなるのか。
東京で2年ぶりに行ったロングインタビュー、
生き方に迷いがいい男は言葉もストレートだった。
この1週間後、栗林は『GRAND-PRIX WEST 第2戦』で優勝した。

僕は羅立文より技術はある。あいつにはハートがある。

——08年7月号の栗林プロインタビューの見出しが「北陸の雄からの脱皮」。あれから2年。栗林プロはさらに一段階上昇したと本誌は思っています。

栗 そんなに変わっていないような気がしますねえ(笑)。持っている力は。

——あの取材時にこんな言葉も頂いてます。「仕事も趣味もビリヤード」。これも変わらないですか？

栗 変わらないですね。僕はビリヤードで人生歩むって決めてます。もしプロでやっていけないとなったとしても、絶対ビリヤードは止めません。今はプロなので、目標は変わらず世界チャンピオンです。必ずなれると思うんです。僕に羅立文(※日本在住の台湾選手。現J.P.B.Aプロ)くらいの我慢強さと精神力があれば、もっと強くなれるでしょうし。

——羅立文をはつきり認めますね。

栗 もちろん。さすがですよ、羅は。先週の『ワールドプールマスターズ日本予選』も、かなり厳しい試合もあったけど、権利を獲りましたから。

——栗林プロも同じように権利を獲ったじゃないですか。

栗 そうなんですけど……。僕と羅を比べると、僕の方が技術的には色々なことができる。それは間違いないです。だけど、アイツにはここ(と、心臓を叩く)がある。ほとんどの人が「嫌だな」と思う球をきっちり入れてきます。僕には人

を「えっ?」って驚かせるショットはある。でも、精神力は羅の方が上ですね。僕は他の部分で補うしかない。

——それは興味深い……。3位になった3月の『ジャパンオープン』。大会1日目の最終戦(ベスト32)で、その羅と、特設会場行きをかけて戦いました。

栗 ジャパンオープンには、必ずキツイ相手が同じ組にいます。最後は羅と当たるだろうなと思ってました。

——栗林プロは今までだいぶ羅立文に勝ち越してますよね？

栗 8勝1敗かな? 相撞きとかも含めて。2敗かもしれないですけど、勝ち越していることは確かです。

——それはすごい。「認めている選手ではあるけど、苦手意識はない」という感じですか？

栗 そう、認めているから試合が面白いのかもしれないです。僕は経験値が高い選手は必ず認めているんですが、そういう選手とやる時は自分の状態がすごく良いですね。

——羅戦は9-5で勝利しましたが、どんな展開でしたか？

栗 序盤はお互いにブレイク後の形が悪くてセーフティ合戦。2マスを40分かかってます(笑)。で、残りの12ゲームが2時間。突き放せない試合でした。

Interview with Japanese New Hero

——終わったら真夜中ですな。

栗 夜12時くらいですね。大井(直幸プロ)も会場が一緒でしたけど、アイツは2時間くらい前に勝ち抜けて、先に帰ってましたよ(笑)。

僕にとってライバルという存在は大井が初めて

——そのままジャパンオープンの話を。決勝日進出はこれで3回目ですね。

栗 はい。1回目(05年)はR・ルアットに、2回目(08年)は青木亮二プロに、初戦(ベスト16)で負けてます。今年のはるかに「戦う精神」が良かったです。去年の『チャイナオープン』(5位タイ)とか海外の経験が生きてますね。結局、準決勝で負けちゃいましたけど、エフレン(・レイズ)相手にああいう球撞きができたのは良かったと思います。

——ベスト16の望月雅文アマ戦と、ベスト8の所勘治プロ戦は？

栗 お2人にはボコボコにされたことがあるんですよ(笑)。だから、「我慢の球撞き」を心掛けていました。ふわふわした感じはあったんですけど、尻上がりにミスは減っていったと思います。

——望月アマに勝った時点で、ベスト16の壁を越えましたね。そんな意識は？

栗 意識というか……まず、緊張感は取れましたね。「ここから行くぞ」っていう気持ちになりました。

——そしてセミ・ファイナル。レイズと大井プロ、どちらが来ると？

栗 僕は来ると思っていました。アイツとやりたかった。あの舞台でアイツとやるのは長年望んでいたことなんです。アイツもあそこで僕と対戦したいと望んでくれていたはずですよ。

栗 それは? ライバルだから？

栗 そう。僕にとってライバルという存在は大井が初めてなので、大切にしたいという想いもありますし、若手で上位に残ったのは僕らだけでしたからね。

——結局、レイズに決まりました。

栗 その時は僕もスイッチ入ってましたから、「俺が代わりにヤツをやる!」って気持ちでした。まあ、木っ端みじんにされましたけど(笑)。

——何が違ったのでしょうか? 技術？

栗 うーん、序盤で僕が①をトバしちゃって、それは自分が悪いんですけど、一言で言えば、僕にいい球はあまりなかった。自分のブレイク後の配置も、レイズのミスの後よね。ギャラリーは気付いてないかもしれないけど、レイズは「ミスしても致命傷にならない撞き方」を熟知してますね、完全に。入れるだけならもっと簡単な取り方があるけど、「トバすところなる」と考えた上で、撞点や撞き方を選んでます。

——つまり、アンドセーフですか？

栗 僕らのアンドセーフとは次元が違いました。厚く外しても、薄く外してもOK。「隠れしろ」が多いんです。あれを見て「やられた!」って頭にきましたよ(笑)。さすがの巧さだったし、結構ダメージが大きかったです。



——それで試合後に、「レイズは自分の2倍は巧い」と言ってたんですね。

栗 そうですね。どこまで知識があるかわからないし、柔軟性もすごい。

——栗林プロは、台湾トップの呉珈慶や柯秉逸とも大舞台のファイナルで戦ってきましたよね。レイズの巧さは、彼らとはタイプが違いますか？

栗 台湾のトップ達は……「すごい」なんです。「巧さ」ではなく。

——「すごい」を具体的に言う？

栗 「ショット力」と、それを可能にする精神力かな。恐らくエフレンは、呉珈慶より精神力は低いと思います。あれだけ知識と技術があれば、迷うことがないし、精神力の不足を補えるということなんでしょうね。僕との試合もね、「柯秉逸ならこう撞くだろうなあ」と見ていると、全然違う発想で来るんですよ。

——やはり「神」なんです？

栗 完全に飛び抜けてます。F・ブスタマンテはまた違って、彼はダイナミック系です。エフレンはダイナミックではない。それと、もう一つ実感したのは、日本人でエフレンを追い詰められるのは、海外で戦う経験をしてきた選手でしょうね。大井がそうでしょう？ 僕も勝てない相手とは思っていません。

——なるほど。では、3位タイという結果についてはいかがですか？

栗 自己最高ではあるんで、それは嬉しいですが、優勝してないから「練習になったなあ」ぐらい（笑）。でも、今回の経験でビリヤードに対する姿勢がまた一段



と良くなったと思いますね。

僕は柴田を認めています。

一流プロだと思って戦った。

——続けて、翌日がワールドプールマスターズ日本予選。栗林プロは見事に権利を勝ち獲った訳ですが、終了が深夜2時頃。ハードな週末でしたよね。

栗 全然平気でしたよ（笑）。ジャパンオープン疲れもなかったし。

——夕方にベスト16が始まって、川畑直弘アマ、塙圭介プロに連勝しました。

栗 川畑アマ戦はヒルヒルでした。塙プロ戦は、後半に塙プロが追い上げてきました。でも、両方とも我慢の戦いができていたんで勝ち抜けられました。

——セミ・ファイナルは北陸の後輩・柴田祐介プロとの戦いでした。リードされる苦しい戦いでした。

栗 ずっと一緒に練習してきている間柄ですけど、大きな舞台で当たるのは初めてかな。僕はアイツを認めます。プレーレベルも高いし、頭も良い。普段は僕、全然負けないですよ。でも、試合は別物。アイツを一流プロだと思いながら我慢のプレーをしてました。そう思い込んで戦えたから勝てたんです。

——そしてファイナルは川端聡プロ。

栗 久々に当たりましたね。僕は川端さんとやりたかったので楽しんでました。

——あの試合も相手に先行されて、そこからの逆転勝利でした。

栗 確か川端さんが6-4にする⑨をト

バしたんですけど、その直前まで「負け
た」と思ってたんですよ。でも、あの⑨
の向き方を見て、「浮き足立っているの
かな？」と思いました。あれを見て巻き
返せる気がしたんです。

——最後は、川端プロの①セーフティを
ジャンプで攻略。取り切りましたね。

栗 あれは最高のジャンプでした。あの
日、それまでジャンプは全てミス(笑)。
あの形は成功率が7割はあるんで、イ
メージは良かったです。

——ゲームボールに到達するまで、緊張
感がありましたか？

栗 なかったです。⑦を撞いた時点で、
完全に緊張は取れてました。⑦⑧⑨の形
が理想的だったですから。

——ああいった日本代表選考会で権利を
獲得したの初めてですか？

栗 いや、アマチュアの時、『ワールド
ゲームズ』の予選会は通りました。今回
はかなり嬉しいですね。あの時以上に応
援して下さるプロの方々や仲間が増えて
いますから。

自分が長けている部分は 以前よりはつきり見える。

——……ということ、本誌もたっぷり
栗林プロの試合を見た1週間でしたが、
改めて「強さ」を感じました。

栗 僕はそう思っていないです。今強い
のは大井と赤狩山(幸男)プロですね。

——そうですね。試合中の表情や姿勢も
実に良かったですよ。個人的な印象です

が、あの奥村健プロ(現J P B F)を思
わせる部分も……。

栗 ああ、そう言われます。でも、「奥
村さんくらい勝てたらな」って思います
けど、あの域に行くにはみんなと同じこ
とをしてちゃダメなんです。海外の
試合に出るだけではダメです。高橋(邦
彦)プロや利川(章雲)プロや奥村プロ
は、他の人がやってないことをやってい
たはずなんです。だから僕もそれを探し
てやっていかないとけない。

——栗林プロの話には、いつも多くのプ
ロの名前が出てきます。観察、分析を絶
やさないですよ。

栗 ほとんどの人を認めてますからね
(笑)。「僕も負けないぞ」という気持ち
が、今ほとんど出てきてるし、「この部分
は僕の方が絶対に長けている」という部
分は、以前よりはつきり見えます。その
せいか、今回のジャパンオープンは上位

に行きやすかった……という誤解され
るかもしれませんが、そんな感覚なん
です。

——例えばR・スーケー、M・イモネン、
呉珈慶など、世界チャンピオン達と自分
を比較して、足りないものを考えたりす
ることはありますか？

栗 ああ、しょっちゅうしますねえ。
——そこで出てくる答えとは？

栗 人によって違います。スーケーだっ
たら精神力、イモネンだったら行き足、
呉珈慶だったら技術。そう考えるとね、
僕もどこかを伸ばせば世界一になれるは
ずなんです。弱点を補うんじゃないで長
所を伸ばす。それと、ラッキーをどれだ
け引き寄せられるプレーができるかっ
とこでしようね、エフレンみたいに。エ
フレンの球は「魅せるビリヤード」っ
て言われてますけど、本人が理に叶って
ると思うことをやってるだけ、無理

に魅せてる訳じゃない。あれが流れを引
き寄せる球撞きなんですよ。

——どこでしょうね、栗林さんの中でま
だまだ伸びしろがある部分は。

栗 僕は結構バランス型のプレイヤーだ
と思います。だから、……もつと巧さを
出しても良いのかもしれない。例えば、
大井や土方準斗プロの、球を入れる技術
は僕より上です。でも、より全般的な技
術や取り方は、僕の方が2人より巧い自
信があります(笑)。だから、そこを追
求して、もつと考えられた巧いプレイヤー
にした方が良くんでしょうね。実際、
最近はその路線で行けているかなと感じ
ます。つまり、その路線って、川端さん
タイプかもしれません。

——ああ。川端プロは「ブレイク、シユ
ート力、リズム」で要約されることも多い
ですが、バランス型ですね、確かに。そ
の戦い方で、栗林プロが目指すものは？
国内ランキング1位は狙っているでしょ
う？

栗 そうですね。周りからも「1位を獲
れ」って言われています。なんか最近、僕
を評価して下さる方が増えてます。今年
の僕のテーマは「我慢」なんです。こ
れを貫ければ、もう少し優勝できるし、
1位があると思います。少なくとも今年
の方がアベレージが断然上ですから。こ
の先も、僕の弱点である「抽選下手」が
出ないと良いですね……(笑)。

——そして後は、出られる海外試合には
全部出る、と。

栗 はい。本当に暴れたいです！



Interview with Japanese New Hero



栗林 達 Toru Kuriyoshi

1982年6月26日生 福井県出身・富山県在住
JPBA39期生。'04年にアマ最高峰の2大タイトル『球
聖戦』(第13期球聖位)と『名人戦』(第44期名人位)
を制覇し、'05年からプロに。'07年『全日本選手権』
準優勝など多くの大会で優秀な成績を収める。今年
は『ジャパンオープン』3位タイ、『GRAND-PRIX WEST 第
2戦』優勝など、シーズン序盤から好調。「年間ランキ
ング1位」を目標に走り続ける。5月には『World Pool
Masters』本戦(ラスベガス開催)に日本代表として参戦
する。ジャストドウィット、MEZZ CUES 所属